立教大学ジェンダーフォーラム2019年度公開講演会

ミソジニーとは何か？

上野　千鶴子氏
（東京大学名誉教授、認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク（WAN）理事長）

2019.11.8（金）18:00-19:30
立教大学池袋キャンパス８号館　8101教室

生（なま）上野でございます。この4月、東大祝辞でバズりまして、こうやって呼んでいただけるようになりました。（拍手と笑い）最近の私の講演は、髪の毛が真っ白か、ない人たちの集まりが多いので、こんなにたくさん若い方たちに来ていただけて、本当にうれしいです。

今日は、原理的かつ理論的なジェンダー論について、きちんとお話ししたいと思います。家父長制の3点セット、ホモソーシャル、ミソジニー、ホモフォビア、これがどのように絡み合っているかというお話です。

そのことを論じるために、この『女ぎらい』という本を書きました。この本を出した当時、タイトルに「フェミニズム」とか「ジェンダー」とか入れたら「上野さん、本、売れませんよ」と言われまして、だから、「フェミ」とも「ジェンダー」ともタイトルにはありません。これを読んだ若い人たちからびっくりするような反応を受けました。「えっ、性差別ってこういうものだったの？　新鮮だった」という声があって、ショックを受けたんです。「新鮮だった」と言われることで、私たちが何十年にわたってやってきた研究の成果が、若い人たちに全く伝わってないってことがわかってしまいました。だから、「フェミ」とか「ジェンダー」という言葉には引っかからないけども、この本を好奇心で手に取った人が、フェミニズムを新しく発見してくださったっていうことなんでしょう。

この本にはネタ元があります。イヴ・コゾフスキー・セジウィックというイギリスの文学研究者の『男同士の絆』です。日本のジェンダー研究は輸入学問であると言われがちですし、たしかに私の研究にもネタ本はあります。ですが、学問の世界では、人から何かを借りるってことは決して恥ではありません。誰から何を学んで、どう使うかということが肝腎です。このセジウィックという人が言った、ホモソーシャル、ホモフォビア、ミソジニーの3点セットは、ものすごく使える概念なのです。私の本はそれを単に紹介したものではなく、日本をフィールドに使ってみたらどうなるかという成果です。

私のこの本は韓国でもバカ売れしました。その理由は、2016年に江南というソウルの南郊で起きたミソジニー殺人という事件にあります。公衆トイレに女性が入ったら、そこでじっと待っていた見も知らぬ男にいきなり刺されました。この事件を最初、当局は変質者による犯罪として扱おうとしたのですが、それに対して女性たちが「彼女はただ女であるという理由だけで殺されたのだ」と声を上げました。その犯人は、「女が自分を相手にしてくれない。女が憎い。女なら誰でもよかった」と言ったそうです。つまり、女なら誰でも被害者になる可能性があったということです。この事件を、「ミソジニー殺人」と名付けた人がいます。この事件の前にすでに私の本が翻訳されておりましたので、このネーミングには私の本があずかっております。そして、この事件のおかげで、ってい

う言い方は大変申しわけないことですが、私の本が韓国でベストセラーになったそうです。こういう事件を「ミソジニー殺人」と名付けることによって、問題をくっきり浮かび上がらせることができたわけです。

ソウルではその殺人現場が一種の聖地になって、女の人が次々とそのトイレを訪ねるようになりました。ある時、そこに誰が置いたのか、ポストイットが置かれ、そこにいろんな書き込みがされていくようになりました。そして、それが膨大に積み重なりました。私はこのうちの一部を通訳の人に読んでもらいましたが、そこには「私は強姦の被害者になったが死んでいない。ただ運がよかっただけだ」、「私は、性暴力のサバイバーだ」、「私は生き延びた。だから私は黙らない」というような声がいっぱい寄せられていました。それから数日後、ソウルは雨模様になりました。雨になると、これらのメッセージは全部紙ですから、濡れるとパーになります。するとなんと、ソウル市の女性センターが大英断をして、メッセージカードを全部回収してセンターに持っていきました。

もしソウルに旅行なさる御予定があれば、是非ソウル市女性センターに行ってみてください。壁の一角にこれが、全面に貼ってあります。そしてその後、予算がついて、この書き込みを全部データベース化するとのことです。こういうことをちゃんと韓国はやっています。

それでは、ミソジニーとは何か。私がこの本を出した当時、ワープロ変換したら、「三十路に」が出てきました。私は「三十路に」どころかその倍以上の年齢ですが。(笑い声)

ミソジニーは、「女ぎらい」とか、「女性嫌悪」と訳されていますが、その定義を、「男が男であるために女でないことを証明するためのメカニズム」、つまり「女を他者化するためのメカニズム」であると言いかえることができます。

男は謎だらけの生き物です。なぜ「女好き」の男は、何人とやったとか、何回やったとか、質じゃなくて量だけカウントするのか。ほんとに嫌なことに、東南アジアからの国際線では、若い男の子ですら「下半身の国際親善に励んできました」っていう会話が聞かれます。何をやったかって言えば、要は女をお金で買っただけです。そんなこと、偉そうに自慢するなって思いますが、そういうことが女好きの証拠になっている。

かねがね不思議でしようがないのは、彼女と一緒に歩いている男が、向うから自分の先輩やなんかが来たら「おーっ」とか挨拶してね。「あっ、お前」とか言われたら、彼女に「すまん、ちょっとオレあっち行くわ」って言って、さーって行ってしまう。で、「何だったの私は?」みたいな経験をした女性は……今どきはもういないでしょうか……私たちの若い頃にはそういうことがふつうにありました。

セジウィックはミソジニーに加えて、「ホモソーシャル」という概念を用いています。最近、「ホモソ」っていう言葉を聞いてびっくりしました。ホモソーシャルという言葉はついに、日本語の省略語として定着して、たとえば「あの会社ってホモソだよね」って言われるようになったようです。どうも男は、異性関係よりもホモソな関係のほうを優先する傾向があるのではないか。実は男は男同士のほうが、はるかに長時間を過ごす関係だし、そのほうが気持ちがいいんじゃないか。家に帰りたがらない帰宅拒否症候群の会社が大好きなおじさんたちも、ホモソな集団に居ることが気持ちいいんじゃないかと思うことがしばしばです。

男が、自分が男であるということを最も誇らしく認識するときって一体いつか? ずーっとこのことを昔から考えてきました。男にとっては女にもてるっていうことが男の評価基準になるのではなく、男同士の中で、ライバルとして相手の力量を認め合った相手からぐっと踏み込んで刃を交わし、耳元で一言、「おぬし、できるな」って言われたときのこの快感、この官能、これを超えるエロスなどないんじゃないかっていう感じがします。何となくわかる?(笑い声) じゃあ、今でもそうなんだ。このセジウィックの本を読んだら、私がかねがね謎に思っていたことが次々と解けるんで

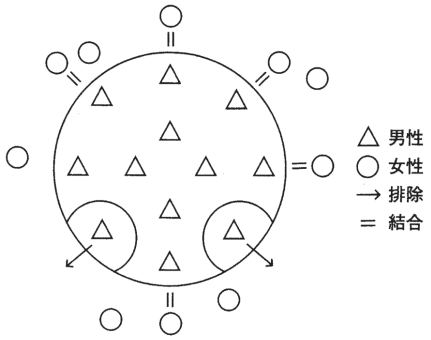

図1　ホモソーシャル・ホモフォビア・ミソジニーの概念図

す。ああそうだったのか、そうだったのかって。

それでは、女の方はどうかっていうと、女にも謎があります。女は何で3K男（高学歴・高収入・高身長）にむらむらするのか？　そういう男に目がキラキラするわけですね。そして、なぜ女は嫉妬深いと言われるのか？　それも女の嫉妬深さは、自分を裏切った男に向かうんじゃなくて、その相手の女を向かうんです。これ、変ですよね。それに、なぜ女の敵は女だと言われるのか？

また、なぜ女同士の友情は成り立たないと言われるのか？　私が若かった頃、『少年ジャンプ』の時代、友情は男の独占物でした。女同士には友情はない。そして、男と女の間にも異性愛はあっても、友情は成り立たないと思われていました。男と女の間に友情は成り立つかどうかということが、ディベートされていました。信じられますか？　あるに決まっているじゃないですか。なのに、そういうテーマが議論の対象になった、そんな妙な時代があったんです。セジウィックの本を読むと、なぜそうだったのかっていう謎が解けていきました。

男はいかに男になるかというと、男に認められることによって男になる。それでは、女はどうやって女になるかっていうと、女に認められることによってではなくて、女は男に選ばれることによって女になる。ここに男が入ってくるんです。

男が男であり、女が女であるということを認めるその定義権は男の手にある。男になる成り方と女になる成り方との間にジェンダー非対称性があります。

別の言い方をすると、これは、男としての社会への参入の仕方と女としての社会への参入の仕方には、その定義権をホモソな男性集団が握っているということです。心理学の研究でわかっていることですが、男性の自己効力感の最大の要因が、稼得能力なんだそうです。経済力が、男の間のパワーの源泉になっています。わかりやすい単純な生き物ですね。男は金と権力でホモソな集団のなかの序列を決定し、女はその金と権力を持った男に萌える。そういう仕組みがあるようです。

ミソジニー、ホモソーシャル、ホモフォビアの3点セットを図示したのがこのモデルです（図1）。ここまでわかりやすいモデルをセジウィック自身は書いていません。これは完全に上野オリジナルです。

社会は、こういうお互いを一人前の男同士と認め合った男性たちのホモソな集団によってでき上がっていて、ここに権力と資源が集中しています。そして、女はその外側にいて、この集団の誰かに選ばれることを通じて、つまり結婚という契約を通じて、このホモソの社会に参入することになります。もし一人の男に選ばれたら、ほかの男はこの女には手を出さないという紳士協定が成り立ちます。逆にいうと、誰にも所属しない女は、どの男が手を出してもかまわないことになります。女同士に友情が成り立たないと言われる理由

は、女というのは、このホモソな集団のメンバーに選ばれることを求めて、お互いに常に潜在的なライバル関係にあるからだと説明されます。だから女同士は仲よくなれないのだということになります。

こんなに単純なセオリーどおりに世の中が動いているとは言いません。ただ、こういうふうに説明されると、いろんなジェンダー現象がわかりやすくなります。

それに加えて、ホモソな集団の周辺に男に男と認めてもらえない男たちがいます。男に男と認めてもらえない男は必ず女性化されます。「おかま」とか「お前、女か？」っていうふうに言われて、その人たちはホモソな男性集団から排除されます。これをホモフォビアと呼びます。ホモフォビアは同性愛嫌悪と訳します。なぜかというと、男性は欲望の主体であり、女性は常にその欲望を向けられる客体であるということに理由があります。この主体／客体関係の非対称性は揺るがないものですが、もしここにホモセクシュアルな男がいたら、自分がそのホモセクシュアルな男の欲望の対象、すなわち客体になるかもしれない。男たちは客体化される恐怖を感じます。客体化されるということは女性化されるということですから、その恐怖に彼らは耐えられません。

しかし、ホモソーシャルな男性同士の関係には、ホモエロティックな同志愛があります。恋という言葉が、もともと男同士の間に成り立ったということは日本文学の歴史を見ればわかります。これを「恋玦の情」と言います。男は男相手に、こいつのためなら俺は死んでもいいと思えますが、女相手には滅多に思わないようです。

男は、こいつのためなら死んでもいいと思える相手と恋玦の情を結びます。その際、ホモソの集団の中では、自分たちが欲望の主体ー客体の関係になることを避けるために、ホモエロティシズムを抑制して、性愛を排除した男性紐帯がつくられます。そうなると、ホモソな集団の中からホモエロティシズムを厳しく検閲して排除しなければならなくなります。男がホモフォビアになるのは、もともと自分たちの中にあるホモエロティシズムを検閲するメカニズムが働くからだという説明ができます。3分で終わるセジウィック講義、終わり。わかりやすいですね。

そうやって見てみると、社会には以下の4種類のメンバーがいることがわかります。男によって男と認められた男。男に男と認められ損ねた男。男によって女と認められた女。そしてそのほかにもう一つ、男によって女と認めてもらえない女がいて、この人たちをブスと呼びます。そして、男になり損ねた男は、必ず女性化されます。

どんな社会にも、子どもが大人になるとき、ホモソな集団によって、これからお前を一人前の男として扱ってやるといわれるための加入儀礼があります。ホモソ集団の成員資格が男に与えられるわけです。

ファミリーの語源はラテン語のファミリアですが、この言葉は、奴隷を含む妻子、つまり家父長の所有物の総称を指します。女は男の所有財です。だから、姦通罪とは、所有権侵害に当たります。男が自分の所有している財を勝手に使われた、それに損害賠償が発生するという法理ですね。

そうやって見てみると、男が男であることは女から独立しているが、女が女であることは男に依存していると言うことができます。そして、女がこのホモソな集団に参入するときには、結婚によって非可逆的な身体上の変化、例えばお歯黒とか入れ墨とか、そういう記号を刻印することが多くの社会で観察されています。

このように、ホモソーシャル的な集団というのは、お互いに男同士と認めあった男たちによる集団、しかも、ホモエロティシズムを検閲し抑制した集団だということがわかります。女を男の欲望と所有の対象として客体化するのがミソジニーです。そして男は性的にも権力の上でも主体ですから、決して客体となってはならない。だから、自分を客体にするかもしれない同性愛者が危険な存在になります。それを排除するのがホモフォビアです。ここまでが基本的な概念の定義です。

男が男になる、女が女になる、そういう性的主体化を通じてのアイデンティティの形成には、ジェンダー非対称性があります。男は欲望の主体として主体化し、女は欲望の客体として主体化します。

おもしろいのは、いろんなポルノグラフィーを見てみると、男は女性の裸やボディーのパーツにムラムラとする傾向があります。AVことアダルトビデオは「抜くためのおかず」と呼ばれていることはご存じですよね。どれも低予算でできていますから、安直につくられているんですが、こんなにワンパターンで安直なシナリオにでも、毎回抜けてしまう僕ってなあに？っていうことになります。では、男女を入れ換えて、男性のヌードや性器など、男性のボディーのパーツを使って同じような映像を提供して、女がムラムラするかというと、そうならないってことがわかっています。

これは、視線の政治学など、アート系のフェミニズム批評の中で蓄積されてきた研究成果です。男性は、性的客体としての女性のボディーやボディーパーツに欲情するが、女性は、主体と客体を入れ換えるという形では欲望が刺激されず、自らが性的客体化されることを通じて、つまり主体的に客体になる女性自身に対してムラムラするということがわかってきたわけです。つまり、女性は客体化された女性に自ら主体的に同一化するということです。このように、欲望の回路にはジェンダー非対称性があります。だから、女の欲望は、いったん客体化の回路をたどって、自分が客体化される立場に主体的に同一化することを通じて欲望の主体になるというややこしいものです。

「イヤよイヤよもいいのうち」とか、「女自身に、強姦願望があるんだろう」とかってよく言われますけども、それじゃ、レイプポルノを女の人たちがみんなで観てみて、ほんとにムラムラするかどうか検証してみようって、実験した人たちがいます。そしたら、結果は、やっぱりムラムラしたっていうんですね。女は客体であることに主体化することを通じて、欲望の主体になることから免責されている、そういうシナリオが女性の中に刷り込まれているんだということが、その実験からもわかります。

そこで起きているのは、女性の客体化、他者化ということです。その客体化とは、男にとっては、自分の欲望の対象としていかようにも扱ってもかまわない、つまり、自分と同じ対等な立場ではないものと女をみなすことです。そこには女に対する蔑視があります。だから、ミソジニーを女性嫌悪と訳します。

女がミソジニーから逃れられるかといえば、ミソジニーとホモソーシャルとホモフォビアは、この社会に重力のごとく見えない力として蔓延してますから、そこから自由な男も女もいません。女がミソジニーを内面化すると、男を憎む代わりに自己嫌悪に陥ることになります。

女の数を誇るとか、外国で買春してきて「国際親善やってきました」なんていうのは、女性蔑視があるからこそ、女を「モノにできる」のです。日本語の「モノにする」って実にわかりやすい表現です。「モノ」というのは物体、つまり客体にするということですね。

逆に女のほうは、そうやって男が与えてくれた指定席に自らを適応させないとその社会では生きていけない。そうやって女の指定席に甘んじることを、女性につきまとう言葉としてよくあるのが、「どうせ」「しょせん」という表現です。その矩を越えようとすると「女のくせに」と言われます。ですからミソジニーに適応した人だけが、女の指定席に上手く落ち着くことができます。ですがそれは、自分の劣位を自ら受け入れるということですから、自己嫌悪につながらざるを得ません。

女はかわいくないと男に選ばれない、だからかわいい女でありたい、とよく言われます。かわいさってなあに？　かわいいとは、相手を決して脅かしませんという保証のことです。そういう女にだけ男はムラムラする。それがわかっているから、かわいいふりをするわけですね。

昨年は、ラグビーブームがありました。4年前には五郎丸歩というスターラガーが活躍しました。当時の彼のインタビューに超ムカついたんで

す。「どんな女性がタイプですか？」と聞かれて、「一歩下がって歩く女性が好きです」。ムカつくと言ってたら、友人がこう言いました。「昔は三歩下がって歩く女って言ったもの。それが一歩になったんだから二歩減ったじゃない」って。（笑い声）

あれほど強くて自分に自信のある男ですら、自分を脅かさない女が好きだって言うんです。日本の男ってどこまでもそうなのかって、思っちゃいました。ミソジニーがあるからこそ、男は自分よりも御しやすい、劣等だと思える女を選ぶのでしょう。

夫の妻に対するモラハラ、パワハラに、「お前みたいなバカなやつは」って、バカだ、バカだと言い続ける言葉の暴力があります。じゃ、何でそんなバカな女を妻にするのかといえば、「バカだから妻にした」のが正解です。なぜかといえば、一生なぶり続けることができるからです。俺のほうが偉いぞって、その都度、自分の優位を再確認して自分の男らしさのアイデンティティを構築することができるからです。学歴の低い妻を選ぶのも、経済力の低い妻を選ぶのも同じです。

先ほど言ったように、男の自己効力感は稼得力、稼ぐ力にあります。こんなにわかりやすい生き物だから、妻の経済力が夫を上回ると、男のプライドは直ちに折れるのでしょう。それほど男のプライドはもろいのでしょう。

男にもてるための必殺技を教えてあげましょうか？　知りたいでしょう？　斜め45度下からちょうど鼻毛が見える角度で（笑い声）見上げて、「あなたって、すごいわねぇ、ほんとに立派だわ。あなたのすごさをわかるのは私だけよ」ってささやき続けることです。これを男の「自尊心のお守り役」といいます。これをやると、絶対もてます。男はそういうお守り役に依存します。女にしてみれば、バカバカしくて、金でももらわないとやってられないので、バーのホステスさんやキャバクラのおネエさんたちがやっているわけですね。

DV夫というのがいますが、なぜ男は愛する妻を殴るのか。なぜならば、愛する妻だからです。自分の所有物だから、逃げない、何をしても構わないと思っている。こういう謎が、するすると解けていってしまうのがミソジニーという概念の切れ味です。

こういうことがわかっていても、女の結婚願望は相変わらずなくなりません。結婚が、男に選ばれた社会的な承認の証だということもあるでしょう。それだけじゃなくて、女が結婚からおりられない、DV妻に経済力があっても離婚できないの

は、結婚にはホモソな社会に自分が参入していると感じられる資格付与の効果があり、この資格を剥奪されると、自分が社会に居場所がなくなると感じてしまうからでしょう。

離婚した女の人たちがよく言うのは、特定の男への帰属関係を失うと、その女がアプローチ可能だと勘違いしてワラワラと男たちが寄ってくるって。一人の男に一人の女があてがわれる。この一夫一婦制を、エンゲルスというおじさんは……。あれ、エンゲルスはもう知らない？　マルクスのお友だち。あっ、マルクスも知らない？　両方知らないのね。エンゲルスというおじさんは、一夫一婦制を女性の世界的勝利だと言いました。一夫多妻制を一夫一婦制に変えたのは女性の嫉妬心だ、と。

とんでもありません。全ての男に女が一人行き渡る。これを男性の間での女の平等分配と呼びます。どういうことかといえば、近代社会とは結婚を通じて男の間での平等を実現するしくみだからです。平等な男達のあいだに実現される民主主義が博愛（フラターニティ）です。フランス革命の評語、自由、平等、博愛のフラターニティは「兄弟愛」と訳します。つまり、ここに女は入っていないのです。

こういうホモソな社会を支えているのは男だけではありません。女も共犯者です。

このホモソな社会の中で、男はマウンティングによって序列をつくります。そして、その中でヒーローが生まれます。男は男に認められたいというヒーロー願望があります。だから、男と認めてもらえないことを男は恐れます。その際に最も恐れるのが、「弱虫」、「卑怯者」と呼ばれることです。この脅迫に迫られて、彼らは死地に赴くわけです。

こういう男のヒーロー願望は、ほんとにはた迷惑なものだと私は思っていますが、女にだってヒーローに求められたいという願望がありますから、ホモソーシャルな集団の中でリーダーのポジションを占めている男は女にもてます。女も自分がリーダーに選ばれるにふわさしい女だという価値を認められたいからです。それがトロフィー・ワイフですね。だから女も共犯者なわけです。これをものすごくすっきりした言葉で言ったのは、ホリエモンという男です。彼は「女は金についてくる」って言いました。ですから男の価値は男自身が獲得したもの、女の価値は男に選ばれることによって付与されるもの、という非対称性があります。

私は、長年にわたって男という生き物を観察してきて、男っちゅうのは、ほんまに金と権力に弱い生きもんやなぁと思いました。それを責めてばかりもいられないのは、女も、金と権力のある男が、好きだからです。こうやって男と女の間に共犯関係が成り立っているわけです。

ミソジニーというのは男にとっては、しょせん他人ごとです。でも、女にとっては、自分ごとなので、女はミソジニーを内面化すると辛い思いをします。自分が女であることを愛せないから、自己嫌悪に陥ります。そこで、「私は別」って言う戦略が生まれます。

例えば名誉男性になるような女がいます。男が「女っていうのはさぁ、感情的で、嫉妬深くて、非合理でどうしようもない生き物だよねぇ」とか言うとするでしょう。それを聞いた女が「あら、私も女よ」って言うと、男が「あっ、キミ、キミは別」って言うような女です。

そういえば、三島由紀夫がすごいことを言ってました。「女は感情的な生き物である。したがって女に論理性はない。だから、論理的な女は女ではない」。（笑い声）　すごい三段論法ですね。私は、論理的な女です。私と論争してごらん（笑）、大概の男は負けるから。

それで、「私は女ではない」って、例外をつくっていくわけですね。ステレオタイプにはまらない「キミは女だけど、特別」という扱いです。こういうとき、もし私が、「そうよ、私は普通の女じゃないわ」って迎合したら、そこでジェンダーの再生産が起きます。私はそのとき共犯者になります。これがいわば、名誉男性戦略です。

もう一つの戦略は、女からおりてしまうことで

す。別名「成り下がり」戦略、「ブス戦略」とも言います。自分が男性から選ばれる可能性がゼロで、ほかの女と争う立場に全くいないという立ち位置を選ぶ戦略です。

私には、今でも胸が痛くなる記憶があります。女子短大で教えてたときに、女の子たちに毎週、簡単なアンケートに答えてもらいました。「女に生れて損か、得か？」といったアンケートです。50人のクラスの中でただ一人、次のように書いてきた女の子がいました。「女に生れて損か？得か？こんな質問はブスの私には何の関係もありません」。こういうことを書くのは、自分が女のカテゴリーに入らない、入れてもらえないと思っているからですね。

成り下がり戦略の立場から、女の醜さをこれでもかと暴き出すのが得意技のすばらしい女性作家さんが、林真理子さまでいらっしゃいます。この方は、女のねたみ、そねみ、ひがみを描くのが大変上手いと言われています。ねたみ、そねみ、ひがみとは、決して対抗できない相手に対して弱者が持つ感情です。怒りはそれとは違います。怒りは、相手に対して対等な権利を持つと感じるからこそ持てる感情ですね。

「私、女性差別なんて感じたことないわ」とか、「ミソジニーなんて、私知らないわ」って言う女性に、私は何人も会ってきました。けれど、どれだけスルーしても、どれだけ否認しても、重力から逃れられないようにこの世の中にはミソジニーがはびこっていますから、それを見たくないっていうだけで、そこにあることを否認することはできません。

その典型がまさに今の皇室ですね。天皇の一人っ子は娘であるばかりに後継者になれません。女が生れると三文安いって言われてきました。娘しか生まなかったせいで雅子さんは適応障害になったんですね。

こんなにあからさまな女性差別があるのに、皇室典範が、男女平等を規定した憲法に違反しているという人は誰もいません。また、女性差別撤廃条約違反だという人もいません。でも、これは、言っていいことです。私たちは、日本のトップ・ファミリーの中でのあからさまなミソジニーを、日々見せつけられています。誰もこれから逃れられません。

セクハラについてもお話しましょう。ハラッサーは女好きだと、ムラムラした性欲からセクハラするんだと言われてきました。それから、セクハラの被害者は若くてきれいな女性だと思われていますが、これはまったく事実に反しています。セクハラを受けたと周りに言いにくいという若い女性がいました。なぜ言いにくいかというと、モテ自慢と思われるからということでしたが、自分が特別に魅力的だから選ばれたと勘違いしているんですね。データからわかることは、セクハラ被害に女性の容貌、体型、年齢は何の関係もないことです。高齢者施設のおばあさんもセクハラに遭いますから。

私が性暴力被害者だと、名乗りを上げた伊藤詩織さんって人がいます。性暴力被害とは、被害者が登場しないことで、なかったことにされる犯罪でした。それを伊藤さんは、実名と顔をさらして、「私が被害者だ、私はここにいます」って言いました。

さらに財務省の福田事務次官のセクハラが起きました。上司にあたる麻生（あっそう）という大臣がしゃしゃり出てきて、いろいろ問題発言をしました。まだご記憶に新しいと思います。

声を上げる性暴力被害者をサポートしようと、#Me Tooや#We Too、#With Youという動きが起きました。集会などもたくさん開かれました。新宿アルタ前（＃私は黙らない0428＠新宿アルタ前）での抗議集会の映像がYoutubeに上がっています。20代の女の子の隣に20代の男の子が立って言っているセリフに感動しました。「これは僕らの問題です」と。よく言ったと思いました。セクハラもDVも性暴力も、全て男性問題です。だから、これを女性問題と呼んではいけないんです。

その20代男子のその発言を聞いたときに、私たちの同世代の男子の態度を思い出して、また怒りが込み上げてきました。日本で最初にキャンパス

セクハラの告発が行われたのは、京大矢野教授事件ですが、まず最初に言われたのは、「最高学府の知性がまさかセクハラなんて」でした。私は、セクハラ防止委員会の調査委員も調停委員も経験して、学んだことがあります。男性教員に関しては、まさかあの人が……とは決して思わなくなったことです。

矢野教授事件の時にそれを告発しようとした女性たちに、私と同世代の同僚の男たちが言ったせりふを、私ははっきり覚えてます。「たかがセクハラごとき小事で、有為な人材を社会的に葬っていいのか」と。どんなに社会的業績を挙げた人でも、人権侵害をやってよいわけはありません。こういうことが近過去にあったわけですね。

そこに新聞労連の女性ジャーナリストが、声を上げました。その声の中に「セクハラは業務の一環だと思っていた」という発言がありました。それをその場で聞いてた男性の委員長が、「女性記者の生の声に改めてショックを受けた。マスコミも男性中心の組織文化を変えるときだ」と発言しました。

セクハラに対して空気が変わったなぁと思ったのはこれです。

それまで被害者が声を上げると必ず年長の女が、「そんなことを言うと、あんたのためにならないよ」とか、「それをいなすのが大人の女の知恵っていうもんよ」と、女が女を抑えてきたものです。TBSの女性記者のセクハラ被害も、最初にもみ消そうとしたのは、女性の上司だったそうです。

ところが、中島京子さんという50代の作家さんが伊藤詩織さんとの対談の中で、こう言っています。「もし私たちの世代がちゃんと声を上げていれば、社会も少しは変わっていたかもしれない。詩織さんがひとりで頑張らなければならない状況にしてしまい、本当に申し訳ない」。

自分が被害者であり続けたせいで、他の誰かに対して加害者になってしまったということを年長の女が認めたのです。私は長い間、メディアウォッチをしていますが、公共の場でのこういう発言は、初めてでした。ここで空気が変わったと思いました。そして、私も反省しました。時々地雷を踏んでは反省するのが、上野のいいところです（笑）。

「こじらせ女子」という言葉をはやらせた、女性AVライターの雨宮まみさんを、知ってる人はいらっしゃいますか？彼女に頼まれて『女子をこじらせて』の文庫の解説を書きました。そこで、こんなことを書いています。

> 男を侮り、男の欲望をその程度の陋劣なものと見なし、そのことによってかえって男の卑小さや愚かさに寛大になるという「ワケ知りオバサン」の戦略である。セクハラにあってショックを受ける女性を「男なんてそんなもんよ」となだめ、下ネタには下ネタでかえすワザを身につけ、男の下心だらけのアプローチをかわしたりいなしたりするテクを「オトナの女の智恵」として若い娘にもすすめる……そんなやり手ババアのような存在になっていたかもしれない。そしてこんなワケ知りオバサンほど、男にとってつごうのよい存在はない。

さすがにこういうことは東大祝辞で言えませんでしたね。（笑い声）

> 「すれっからし」戦略とは、男の欲望の磁場にとりかこまれて、カリカリしたり傷ついたりしないでやりすごすために、感受性のセンサーの閾値（いきち）をうんと上げて、鈍感さで自分をガードする生存戦略だった、と今では思える。男のふるまいに騒ぎ立てる女は、無知で無粋なカマトトに見えた。そうでもしなければ自分の感受性が守れなかったのだが、ツケはしっかり来た。感受性は使わなければ錆びつく。わたしは男の鈍感さを感じなくなり、いつのまにか男にとって便利な女になっていた。（上野千鶴子「解説」、雨宮まみ『女子をこじらせて』幻冬舎、2015年、250-1頁）

反省。

私もこういう時代の流れの中で変わってきたということがわかります。

男性の性暴力に対する女性の受忍限度がどんどん下がってきたできごとが昨年ありました。実の娘を、13歳から長期にわたって強姦し続けてた実父が、名古屋地裁で無罪判決を受けました。合意はなかったが、抗拒不能ではなかったというトンデモ判決が出て、女性法曹たちが怒り狂いました。判決に大きな問題があるという判決の限界なのか、それとも、法律にそもそも問題があるという法律の限界なのか、どちらによるものなのかには議論があります。法律に大きな問題があることは確かですが、こんなこと許せない、ガマンできないと、日本学術会議では、この事件についてのシンポジウムを実施しました。そこで時代の変化を感じたのは、実の娘が実の父を訴え、そしてそれを裁判にまで持っていったことです。以前ならきっと闇に葬られていたことでしょう。

こうやって見てみると、女性の間で、性暴力とか性被害に対する受忍限度が、どんどん下がってきたんだということがわかります。男は昔からそんなに変わってないと思います。だけど、女性が大きく変わった。それでは何が変わったかというと、女性の受忍限度が変わった。昔の女たちがのみ込んできたことを、今の女たちはガマンしなくなったのです。

ある取材で女性の受忍限度が低下したと言ったら、後でその記事が送られてきて、そこにこう書いてありました。書いたジャーナリストは男でした。

「女のガマンが足りなくなった」。(笑い声)

それはそのとおりなんですよ。

こういう変化がどんどん起きてきたのは、フェミニズムの功績の一つであったと思います。

かつて「からかい」とか「いたずら」と呼ばれていたことを、フェミニズムは「セクハラ」と呼びかえました。「痴話げんか」と呼ばれたものを、DVと呼びかえました。以前なら、殴られてあざをつくった奥さんが交番へ行って「助けてください」って言うと、「奥さん、どうしたんですか」って聞かれます。そこで「夫に殴られました」と答えると、「まあ、犬も食わない痴話喧嘩ですか。仲良うしてください」って言われて帰されたものです。今、こんなことやったら完全アウトですね。さらに「つきまとい」は「ストーカー」になりました。

ほんとにびっくりしたのは、東京メトロで「痴漢は犯罪です」というポスターを見たときです。そのときの感動を、私は今も忘れません。フェミニストはこうやって新しい概念をつくり、定義を変えてきたんです。

定義が変わると何が起きるかっていうと、あのときのあのモヤモヤは、あれはもしかしたらセクハラというものだったのかしらって思えるようになります。そして、私は悪くなかったんだって思えます。つまり過去に遡って経験の再定義が可能になります。こういう変化が女の間で起きてきました。

そうした中で大ショックをもたらしたのが、東京医大の不正入試問題です。びっくりしました。こんなことがきょう日、堂々と入試で行われているとは夢にも思いませんでした。文科省の次官の息子の裏口入学疑惑の捜査の過程で芋づる式に出てきたので、もしその事件が発覚しなければ、今でもやっていただろうと思います。さすがに放置できないというので、文科省が全の81医大＆医学部の調査をやったら、東京医大はまだましなほうだったということがわかって、またまたびっくり仰天です。

とりわけショックだったのは医学界の冷たい反応でした。「必要悪」、「女は使えない」っていう意見がいっぱい出てきました。女性医師の仕事量は男性医師の8割だそうです。だから女性医師を養成してもコスパが悪い。医師の養成のためには非常に大きい教育投資がかかっています。そして、その教育投資の過半は国民の税金で賄われています。そうなると、投資効果がない女性医師を育て

るのは、税金の無駄遣いだということになります。ここで女子医大生亡国論が出てくるんじゃないか……と私はハラハラしていました。

考えてみたら、男の医者の働き方のほうがはるかに問題なんですから、男性医師の仕事量を8割に抑えて、給料も8割に減らせばいい。そんなまともなことを言う女子学生がちゃんといました。「何もかも妻に任せて家庭責任を背負わない男性医師のツケを、なぜ女子受験生が払わされるのか」と。もっともな意見だと思います。

医師国家資格試験の動向を見て、どうも何かおかしいなぁとずっと思っていた女性医師たちがいました。もう何年も前から医師国家資格試験の女性比率がずっと横ばいで3割台を越しません。女子の大学進学率が5割近くに上がっていましたから、なぜ医師だけ増えないのかなと思ったら、実のところ、ゲートコントロール、つまり入り口で通せんぼされていたのですね。医学部入学者のほぼ全員が、医師国家資格試験の受験生になりますから、入学の時点から女性枠を絞り込んでいたというわけです。

日本学術会議の女性会員たちはこれにも怒って、「横行する選考・採用における性差別：統計から見る間接差別の実態と課題」というシンポを実施しました。本田由紀さんがつくってくれたポスターは、立入禁止、つまりここから先に入れないということを象徴するデザインでした。こういう間接差別という形での女性差別は、今でも横行しています。

ミソジニーの一つのあらわれがセクハラですが、セクハラを受けて感じる、あの何ともいえない、いやーな感じの元にあるものは一体何でしょうか？

財務省の麻生大臣は「セクハラ罪という罪はない」と言いました。たしかに、セクハラ罪という罪名はありませんが、判例が蓄積した結果、セクハラは法律上の不法行為であると認定されています。セクハラは、人権侵害です。そこで侵害され

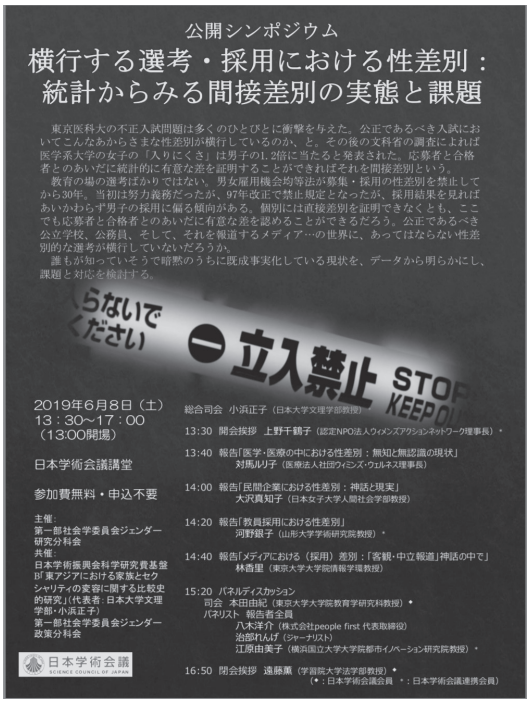

図2　日本学術会議公開シンポジウムのポスター
「横行する選考・採用における性差別：統計からみる間接差別の実態と課題」（本田由紀氏作成）

る人権とはいかなる人権かというと、法律家によると、性的自己決定権の侵害となります。たしかにそのとおりではありますが、この概念は、私たちがセクハラに感じるあのいやーな感じを説明してくれません。セクハラを受けているときに何が起きてるのかを、もう少し考えてみましょう。

ジェンダーの実践という概念があります。私たちはジェンダーを男女の項を表す名詞として使っているわけではありません。だから、ジェンダーには複数形がありません。ジェンダーとは、男女の差異化であり、その差異化の中に権力の差が埋め込まれていますから、非対称な差別化の実践と言えます。よってGenderingとかGenderedとか、動詞化されます。

それではセクハラの中で何が行われてるかといえば、「お前は女だ」「しょせん女だ」「思い知れ」という差別化です。どうあがいても女のお前は男になれないという権力の誇示が行われています。その過程で、男としてのアイデンティティが再構築されます。

では、その「お前は女だ」というときの、女とは何者か。定義は超簡単です。女とは、男ではない者のこと。つまり男の欲望のために存在する者のことです。

女とは、男である自分の欲望をかき立てる存在。男をムラムラさせて何ぼ。だから女は、誘惑者として男から定義されます。そうなると、ムラムラさせるのが女であって、ムラムラさせない女は女ではないということになります。オレさまを欲望させない女に存在価値はないという、男の視線による女性の値踏みがそこでは行われています。つまり、評価基準は常に男の手の中にあって、評価される側に女がいることになります。

この非対称なジェンダーは、男が男になる、女が女になるメカニズムの中にふかーく埋め込まれています。フェミニスト心理学者の小倉千加子さんが、卓抜な表現をしています。女の子の思春期は何歳からか？　年齢では決まらない。少女が自分の身体が男の性的対象となることを自覚したときから思春期は始まる、と。だから、3歳の女の子でも5歳の女の子でも、かわいい仕草をやってごらんって言われて、やるとウケるということを学んじゃうわけです。

このように、あるときから女が女になるのだとしたら、同じように、あるときから女ではなくなることになります。では、女はいつ女でなくなるかというと、おばさんになったときに女からおりることになっています。

例の財務省のセクハラ事件があったときに、女性議員さんたちが抗議の文書を持って、財務大臣に手渡しに行きました。それを見た自民党の長尾という男の議員がその姿を観て、「こちらの方たちはセクハラとは縁遠い方々です」って言いました。これこそを、セクハラ発言というのです。つまり、お前らはオレさまをムラムラさせない、だから女として値打ちがない、と言ったも同然です。おいおい、お前が評価者かよ！って。

こういう実践が日々、いろんなところで行われています。だから、恋人と一緒に歩いているときに、向うからきれいな女の人が来て、恋人に「あっ、きれいなねえちゃん」って言われたときに、何かこうぞわーっといやーな感じがするのは、評価基準が男の手の中にあって、女のランキング・オーダーの中に自分が組み込まれてしまうことを感じる、その不愉快さがあるからです。「きれいだね」もセクハラなのか、と言われれば、はい、そのとおりです。なぜなら女の評価基準が男の手の中にあることを少しも疑わない無邪気さと鈍感さが、ミソジニーというものだからです。

セクハラ・アカハラ・DV等も、男が衝動的にムラムラしてやったという「性欲神話」がくつがえりつつあります。実はセクハラ男やDV男は、ノーを言わない・言えない相手に、逃げない・逃げられない状況で、周到かつ巧妙に迫ってるということがわかっています。

私は最近、若い共著者たちと共に『戦争と性暴力の比較史へ向けて』という本を出しました。戦争に性暴力はつきものだと言われますが、男は性欲から女を戦場で強姦したのか、あるいは慰安婦を必要としたのか、というと、決してそうではな

いっていうことがわかっています。日本軍兵士の研究によれば、彼らはやりたい放題やってもいいところと、そうじゃないところをちゃんとわきまえて行動しています。だから性欲からかというと、実はそうではありません。

ムラムラしてやったとか聞くと、私はいつも思うんですが、男は性欲の奴隷かよ！と。時々、女は子宮で考えるなんて言う人がいますが――こういう人には至急訂正してもらいたいです――、それなら、男はチンコに振り回される生き物なんでしょうか？

近年、戦場の性暴力についてのパラダイムが変わりました。戦場の性暴力とは、敵の男性性に対する最大の侮辱であるからこそ、行使されます。つまりそれは、所有物である女を守り切れなかった敵の男に対する最大の侮辱行為であって、それが彼らの怒りをかき立てることをよく知っている男たちによって採用される兵器の一種であるというわけです。ですから、性暴力は戦争兵器であるという考え方が主流になってきました。

2018年に、コンゴの婦人科医のデニ・ムクウェゲさんとISによる性暴力被害者のナディア・ムラドさんが、ノーベル平和賞を受賞しました。性暴力は決して戦場における偶発的なできごとではなく、黙認も含めて戦争兵器であるという認識が広がってきたからです。

このように、性暴力に対する見方も変わってきました。つまり、性暴力とは、男らしさをその都度確認し、再構築する、そういうジェンダーの再生産行為なんだということが、わかってきました。

セクハラの研修について興味深い話があります。セクハラ研修は、以前は、セクハラ被害者になる蓋然性の高い女性が対象でしたが、今は180度変わって、セクハラ加害者になる蓋然性の高い管理職以上のおっさんが対象に変わりました。そのおかげでセクハラ講師業界はバブっていますが、その研修で講師のいうせりふに、こんなものがあります。「もし自分がセクハラしそうになったとき、相手が社長の娘や上司の妹だったらと考えたら、手が止まるでしょう」。

この研修の仕方は適切でしょうか。これは、相手の女性に対する尊重ではなくて、ホモソな社会における権力に対する怯えに訴えかける言葉です。自分よりも権力の大きい上位の男に対する恐怖から自分の欲望を抑制するということですから。

先ほど紹介した新宿アルタ前の若い男女のスピーチの中でも、男の子が、「これは僕らの問題です」って言うから、ひゃー、カッコいいと思ってたら、最後にがっくり来ました。「もし被害者が、自分の姉妹やガールフレンドだったら、許せるでしょうか」と言ったからです。それでは、男としての自分のプライドを傷つけられるということになり、女性に対する尊重の態度とは言えません。ここからわかることは、女のセクシュアリティは男の所有物であるという考え方が、二十代の男性の中にもあるということです。

では、女を自分の所有物だと思っている男のその所有権が侵されたらどうなるのか。佐藤文香さんというブリリアントな女性の社会学者が「保護ゆすり屋」という概念を紹介しています。男は「お前を守ってやる」と言うが、その「守ってやる」というのは誰から守るのかというと、他の男から囲い込んで独占してやるっていう意味にほかなりません。その「守ってやる」という保護に失敗したとき、男は、相手の女にどういう振る舞いをするかというと、切り捨てるか、差し出すか、排除するか、なんだそうです。なぜかって、保護に失敗したときの男性性の屈辱に耐えられないからです。

これを日本の男たちが経験したのが、占領期です。日本は一度も外国の占領を受けたことのない国ですなんてことを言う人がいますが、日本は、アメリカに占領されました。そのとき占領軍によって非常に大きな屈辱を味わいました。その占領軍兵士たちに群がる「パンパン」と呼ばれるおネエさんたちを、日本の男は、占領者に差し出した上で切り捨てました。『戦争と性暴力の比較史へ向けて』の中にはこの「パンパン」の研究が収録されています。これまで日本にはそういう研究をやる人たちがほとんどいなかったのですが、最近

になって、このような戦時期の性暴力研究がようやく表面に出てきました。

ここで私たちが使ったのが「性暴力連続体」という概念です。この「性暴力連続体」というのは、リズ・ケリーという英語圏の研究者の概念です。性暴力については、どこからが被害で、どこからが合意なのか？実際には女性の性的経験の中には、合意から強制までのコンティニアムがあって、線を引くことが困難です。

例えば、夫からセックスを求められたときに、イヤだと言ったら何が起きるかというと、夫が不機嫌になる、一週間口をきいてくれない。それが辛い。ならば、それに耐えきれないから20分黙って股を開いた方がまし、と女性が思うのは、合意でしょうか、強制でしょうか。

そうなると、実は女性の日常的な性経験の中に暴力が潜んでいます。どこまでが強制で、どこからが合意かと線引きできないような、そういう連続体上にあるんだと論じました。

この本を書くに当たって、若い研究者たちと一緒に2年間かけて準備して、最大限の力を費やした本だったんですが、売れてません。(笑い声)

セクハラ対応とかセクハラの告発をいろんなところで見るたびに、私はむなしい思いがするんです。西にセクハラあれば行ってこれを告発し、東にDVあれば行って支援する、ってモグラ叩きです。だから、臭い匂いは元から絶たなきゃダメ！ってことです。基本的には、女性を客体化するような、女性を男性よりも構造的に劣位に置くような、非対称なジェンダーの権力関係が再生産されている限りは、セクハラはいたるところで起きます。だから、この構造を根本的に変えなければなりません。

そこでは、エロスが権力化されるのみならず、権力もまたエロス化されているからです。エロスっていうのは性的欲望のことですが、何にムラムラするか、何に萌えるのかということ自体が、権力の非対称関係のもとに身体化されているからです。

言っておきますが、性的欲望はDNAによるものでもホルモンによるものでもありません。文化と歴史によって学習されたものです。たとえば、自分より背の高い女だとそれだけで萎えるとか、あるいは自分より学歴が高いと女として目に入らないとかですね。

男と女のどちらも、そういう意味では共犯関係にあります、そうやってジェンダーの非対称的な権力関係のシナリオを、男女が共演し合うことによって再生産してきたということなんですね。

それでは私たちフェミニストは何を言ってきたかといえば、「女が女であるために、男の承認なんていらない」ということです。半世紀以上同じことを言い続けてきたのに、それでもやっぱり、若い女の子たちが「もてたい」とか「結婚したい」とかっていうのを聞くと、「キミたちはまだ男の承認に依存してるのか」って言いたくなります。そのぐらい家父長制は壊れにくくて根強いです。

Doing Genderという概念があります。Doing Genderとは、ある個人の振る舞いをジェンダーを参照することによって説明することです。その都度、ジェンダーは再生産されています。例えば、次のようなせりふ。「やっぱり女だねぇ」。もしくは「お前も男だろう」。そんなふうに言うたびに、そのとき、その場であなたはジェンダーを再生産することになりますし、それに同調したとき、あなたもそれに加担したことになります。

日本語ってほんとにやっかいな言語で、一人称単数の主語を使うときに、ジェンダーを参照しないと口火が切れない。「私」と言うか、「俺」と言うか、「僕」と言うか。その位置取りによって、相手に対するスピーチレベルが決まるということがあります。そういう意味では、日本語ってジェンダーまみれの言語なんですね。ですから、日本語を使うたびに、ジェンダーから逃れるってことが難しくなっているわけです。私たちは、このぬかるみのように瀰漫したジェンダーの重力から逃れることはできないのかって思っちゃいます。

理論というのはおもしろいもので、完璧な理論というのは、あらゆることを説明し尽くしてしまうので、そこから逃れることができないという無

力感を人に与えてしまいがちです。その意味で、セジウィックの理論は強力です。そうか、そうかって腑に落ちると、それじゃこれだけ、骨がらみ身ぐるみからめ捕られたミソジニーから、私たちは逃れることができないのかっていうふうに絶望してしまいます。

けれども、日常の実践は、日々変化していきます。私のように、半世紀以上生きてくると、世の中の変化がこんなに起きたのだなと感じることができます。半世紀前には存在しなかったジェンダーという概念や、DVっていう概念が、これだけ広まりました。そうか、世の中は変わるんだと実感します。それじゃあ、私たちにできることは何かっていうと、あります。日常実践の中にDoing Genderがあるならば、Undoing Genderもありえます。

Undoingという英語は「巻き戻す」とか、何かを「無効にする」ということですが、それが私たちにはできるはずです。Doing Genderの定義が、ある個人の振る舞いをジェンダーを参照して説明することだとすると、その逆のUndoing Genderは、ある個人の振る舞いをジェンダーを参照して説明するのをやめることです。

「やっぱり彼女も母親だよね」とかね、「お前も男だろう」っていうたびにジェンダーの再生産に加担していることになりますから、その時、その場でそれに対して「イエローカード！」と言っていくのがUndoing Genderです。この結果が、今日のセクハラ告発とDV支援につながっています。一人一人の女が日常実践の中で、ノーと言ってきたその積み重ねは、大きいですね。

そして、男にやれることも十分にあります。男はジェンダーの再生産の場に際して、絶対に共犯者にも傍観者にもならないことです。東京大学の某工学部教授が、大学院生の集まりで「女は、子供を産むとばかになる」と発言しました。「お前は、ばかな女から産まれたのか」って言いたくなりますが。（笑い声）こんなことを公言する教授がいました。そのときに、ガハハ、ドワッと笑ったら、笑ったあなたが共犯者になります。その時、その場にいた男性の院生が、「先生、それはないでしょう」って言いました。そのときにUndoing Genderが行われるんですね。

そういうような実践が日常の中で行われています。そういう実践の繰り返しと蓄積によって、世の中の空気は変わっていきます。事実、私たちはそうやって社会を変えてきました。

私はうんと若いときに、「非常識な人だね」って言われましたが、当時言っていた標語があります。「きょうの非常識は明日の常識」。そのとおりになりました。

聞いていただいてありがとうございました。

〈拍手〉

質疑応答

質問者A：お話ありがとうございました。最近、夫婦の呼び方について、奥さんとか旦那さんっていう言葉にも上下関係があるんじゃないかってことで、夫さんとか妻さんとか呼ぶという話があるんですけど、それにまだ馴染めず、どうすればいいかなと悩んでいるところであります。先生はどのようにお呼びになりますか？

上野千鶴子氏：誰がなじまないんですか？

質問者A：私自身が。

上野千鶴子氏：あなたが？

質問者A：はい。

上野千鶴子氏：ふーん。あなたは、主人って言いますか？

質問者A：主人って奴隷みたいですよね。

上野千鶴子氏：でしょう。言語は生ものですか

ら、変わります。主人という言葉は、実は明治時代に広がったものだということがわかっています。そして、主人に合わせて奥さまという言葉も広がりました。奥って漢字を見てください。奥にいる人のことですよね。こんなに出歩いている人のことを、奥様って言っちゃいけません。(笑い声)　だから、そうやって歴史的に生れた言葉ですから、歴史のある時点で成立したものには、歴史のある時点で終わりが来てもかまわない。だったら、あなたが終わらせたらいいんです。

質問者B：お話、ありがとうございます。ちょっと個人的なことになるんですけれど、高校は男子校出身で、そこには自分は同性愛者じゃないっていうことを言わないと自分のことを定義できない異性愛男性がすごくたくさんいたんです。だけど、私はその異性愛男性には含まれないので、すごく閉塞感があったんです。そのときに感じていた閉塞感っていうのも、やっぱり家父長制の再生産から来るものなのかと思っているんですけど、どうでしょうか？

あと、ちょっと昔の話というと失礼かもしれないんですけれども、先生の『女は世界を救えるか』っていうタイトルの本を私読んだときに、このタイトルの前提に、男は世界を救えているっていうことが当時の社会の中にあったのかなと思ったんですけれども、いかがでしょうか？

上野千鶴子氏：前半の質問についてですが、ホモフォビアという概念は、異性愛男性に含まれない男性の扱いを説明できます。同性愛者は男性の世界から放逐されるんですね、そういう差別を経験してこられたということですか。

質問者B：そうです。はい。

上野千鶴子氏：ですから、ミソジニーとホモフォビアとホモソーシャルは、その3つが非常に緊密に絡まりあった3点セットになっているので、この絡まりあった関係を解体していくという点では、家父長制に抵抗する共闘関係を、女性と非異性愛男性の間で組めるかもしれません。

質問者B：はい。

上野千鶴子氏：もう一つは『女は世界を救えるか』について、1980年代の本ですね。今のご質問だと、その本、読んでおられないでしょ？

質問者B：あっ、きちんと全て読んでいないです……。

上野千鶴子氏：読んでから質問してくださいね（笑）。簡単にいうと、何でそんなタイトルつけたかっていうと、当時、今みたいに女をもてはやして、もう人類も文明もおしまいだ、男が滅ぼした文明や社会を今度は女に救ってもらおうって、そういうことを言うおっさんたちがいっぱいいたんですよ。私はね、とんでもねぇ、あんたたちが壊した社会を何で私たち女が尻拭いしなきゃいけないんだよって言ったのが、『女は世界を救えるか』。男が救えない世界を女が救えるわけがない、ですから、その答えはノーです。

質問者C：お話、ありがとうございました。先生の本も読ませていただいて、今回参加させていただきました。

私は30歳で大学に入って、それまでは学業もやってこないでずっと演劇をやってきました。その中で、あるカンパニーというか劇団の主催者から、性的な行為をかなり強いられてきたということがありました。でも自分の中では、その経験をモテてよかったとか得してたみたいなふうな感覚でとらえていたのですが、同時にどうしても気持ち悪さというか違和感をずっと拭えずに時間を過ごしてきました。そして、そのことから縁を切って大学で勉強していく中で、先生の本などを読んだりして、やっと何か自分が抱えていた嫌な気持ちというか違和感というものを改めて言語化することができるようになりました。先生の本に出会えたことはほんとによかったと思っていますし、今回のお話もとてもためになりました。

ただ、自分が今、日本では#Me Too運動などがどのように進んでいるかっていうのもあまりつかめていない部分もあるし、自分がこの違和感を抱えたままどのように生きていけばいいかっていうことに今も悩んでいるところはあります。現在も、それはもう昔の話だ、10年前の話、10年前の経験だろうというふうに言われてしまえばそれでおしまいなんですけれど、それが原因でうつ病を発症していたりもして、とても難しい状況に自分の中ではあり、じゃ、どのように今後行動していくか。

最後にUndoing Genderのお話をしていただいて、行動にどう移すかということがあると思うのですが、例えば#Me Too運動も日本ではあまり盛り上がっているようには感じられない部分があります。もし、こういうような立場にいる人が何か行動するとしたら、日本ではどのようなことが可能なのか、先生に何かアドバイスをいただけたらなと思います。よろしくお願いいたします。

上野千鶴子氏：随分前の話だろうが何だろうが、慰安婦のおばあちゃんたちだって70年前の経験に苦しみ、そしてそれを再定義することができるんです。再定義すると何ができるかっていうと、私は悪くなかったんだって自己肯定ができるんです。自己肯定ができるということは、それから後の人生を前を向いて歩いていけるっていうことなんです。

よくぞ決意なさいましたね。多分、そのおっさんは、大変ご都合主義的に女性につけ込んだんだろうと思います。どんなに昔のことでも、自分にとってネガティブだったできごとを、自分の人生の中に統合して、自分を肯定して前向きに生きていくために私たちはこういう概念をつくってきたのです。

私たちは、女性学、ジェンダー研究を、女性運動の理論的な武器と位置づけてきました。フェミニズムと女性学は車の両輪だと思ってやってきたので、単に知的な関心だけでやってきたわけではありません。

#Me Tooについては、本当に不愉快な思いをしました。メディアから取材を受けるたびに、「#Me Too運動は海外では広がったのに、日本ではどうして広がらなかったんでしょう？」って訊かれました。ご紹介したようなさまざまな抗議の動きが、都内だけではなく、各地でありました。フラワーデモは全国に広がっています。そして性暴力

を許さないっていう空気が生まれました。

でも、こういう集会やシンポをやっても、メディアが取材に来ませんし、報道しません。皆さまのNHKは、報道もしてくれません。その後、私はある大手メディアの女性記者から「院内集会に取材に行きたいと企画書を出したら、デスクの男性に、取材の価値がないといって握りつぶされた」と聞きました。たかが女子供の言ってることには、報道の価値がないと……。取材に来なかったのは誰なんだ、報道しなかったのは誰なんだ。日本でも#Me Tooの運動には深く広い動きがあったと、私は確実に手応えを感じています。じゃあ、どうすればいいのって思ったら、チャンスはいっぱいありますから、出かけたらいい。フラワーデモは、今でも各地でやっています。

そして、安心できる、信頼できる人の前で自分の経験を言語化することです。言語化するっていうのは、すごく大事なことです。言語化するのは、自分とその経験を切り離すということです。

ただし、それには相手をうまく選んでやらないと傷つきます。「思い過ごしだよ」とか、「考え過ぎだよ」とか、いろんなことを言われますからね。だから、つまんない相手には言わないことです。信頼できる、安心できる相手を選ぶ。その基本のキは、自分と同じような経験を共有できる女性の間で、自分の経験を言語化することです。私たちがやってきた女性学、ジェンダー研究は、女性の経験の言語化と理論化でした。

これが、言えてよかった。ありがとう。

質問者C：どうもありがとうございました。

質問者D：本日は講演をお聞きできて、とても嬉しかったです。2つ質問があります。

Undoing Genderを実践していくときに、自分ごととして考えたら、公の立場、パブリックな立場として発信していくこと、立場表明をしていくことはできる気がするんですけど、例えばプライベートでの恋愛とか人間関係とかを考えたら、それがむずかしいように感じてしまいます。既に思春期を迎え、脳内回路がすでに固まってきた私たちは、快楽の得方などが既存の価値観で構築されているといいますか、簡単にいえば、客体として見られているということを快感とするという回路が多分に存在していると自分には思えます。そういうときに、そのジレンマにどう対処すればよいのかというのが1つ目の質問です。

そして、女性に限らず、例えば大学生一般には色恋沙汰の話が結構多いと思います。その色恋沙汰というか、恋愛の話とか異性の話をするときに、そこにはすでに既存の重力のようなミソジニーの考え方や社会通念が根底にあるので、自分の立場としてはUndoing Genderを実践していきたいという男性がいたとしても、普通に娯楽として人としゃべっているときにみんなはそういう話をするのが楽しいとかおもしろいとか思っているわけで、それを制限しようとすると、社会は窮屈なものになっていくのではないかとも思えます。これが2つ目の質問です。よろしくお願いいたします。

上野千鶴子氏：おもしろい質問ねぇ。あなた、お幾つ？

質問者D：今、二十歳です。

上野千鶴子氏：二十歳でもう脳内回路が固まってんの？（笑い声）　快楽の回路が固定化するほど……。だって、自分のセクシュアリティや身体を、そんなに開発し抜いてないでしょう？

質問者D：なんか少女マンガとかを見ていると、やっぱりこう……

上野千鶴子氏：それって全部、外からの刷り込みじゃない？

質問者D：そうです。

上野千鶴子氏：Undoing Genderって、そのとき、

その場でやらないと効果がありません。快楽の回路は刷り込みされるものです。刷り込みされますけど、メニューはいっぱいあるから、いろんなメニューを試してみたらいい。例えばマグロ状態のセックスよりも、能動的なセックスのほうがもっと楽しいってことがわかったりするわよ。もっと自分の身体を開発なさったらいかが？

そして、メニューを増やせばクオリティが上がるから。そうするとステレオタイプなセックスは、なんてクオリティが低いんだろうってことを学習なさるでしょう。二十歳でそんなこと言うのはまだ早いよ。

続いて、パブリックな場ではUndoing Genderができるが、プライベートではできないということについてです。私は確信がありますが、若ければ若いほど、人生経験の幅が少ないから、ステレオタイプに汚染されやすいです。みんなでワイワイ言ってるときに乗れない。乗れないって感じながらも、一緒に乗ってしまえばそのときにステレオタイプの再生産、つまりDoing Genderにあなたたち全員が加担してるんです。

ただ、プライベートな関係って、本当にそんなにその場のノリだけで持つものでしょうか？　プライベートな関係の中で最も踏み込んだものは恋愛でしょう？　恋愛とは、他人の人生を自分の人生に巻き込む、あるいは自分が他人の人生に巻き込まれるという、踏み込んだ人間関係でしょう。その中で、相手にUndoing Genderしなければ、相手は決して変わらないでしょう。

プライベートではUndoing Genderができない、パブリックではできる。全く逆だと思います。プライベートな場でこそUndoing Genderをやって、「たった今、あなたが私にやったこと、一体何なの？」っていうことを、そのとき、その場でその都度イエローカードを出していかないと、男は決して変わりません。

質問者D：ありがとうございました。

質問者E：お話、ありがとうございました。私、韓国人留学生なんですけど、2016年にまさに上野さんの本を読んで社会学部に進学しようと思って、今ここにこうして講演会に参加することができて、とても嬉しく思っています。

今、韓国には、トランスジェンダーについて、特にトランスジェンダーの女性に対してなんですけど、トランスジェンダー・クィア・スタディーズはフェミニズムにとってよくないものであるという主張をする何人かのフェミニストがいます。トランスジェンダーの女性は男性なのにスカートを履いて化粧をして、そうした方法で女性になろうとするから、トランスジェンダーの存在は女性性を再生産すると考える人たちです。韓国でのこの件について、上野先生がどのように考えられるのか気になります。お願いします。

上野千鶴子氏：うーん、私は、韓国のことあんまりよくわかりません。トランスジェンダーといってもいろんな人たちがいるからね。

男でいたくないという人たちが、男でいたくないためにとる選択肢が現在では女になることしかない。性別二元論的に男でなければ女、女でなければ男、2つに1つかないと思われているから、男であることをやめようと思ったら女であるように見せるしかないというふうになってしまうのが、今の女装コスプレです。だけど、男であることや女であることはやめたいが、だからといって反対の性になりたいわけではない、どちらにもなりたくないという人たちが、これからおそらくたくさん出てくると思う。

私たちの社会には、選択肢が2択しかない。一方を嫌だっていうと、じゃ、他方かって言われちゃうので、強制的に2択のどっちかを選ばされています。そこに3択、4択が出てくれば、選択肢はもっと広がると思います。

TGを受け入れるか受け入れないかが非常に大きな問題になっているのは、現実に個人のアイデンティティの上ではそういう性の多様化が進んでいるのに、それを受け入れる社会が、建物も制度も何もかも含めて、性別二元制のもとでで き上

がっているからです。トイレが男子トイレ、女子トイレの2択になってる。全部トイレを個別のユニバーサル・トイレにしたらいい。それだけのことなんだけど、それだけのインフラの整備を、大学がお金をかけてやるかどうかね。

司会：本日のお話は、理論的なお話でありつつ、同時に日常経験に即したお話でもあり、ユーモアにあふれつつ、また同時にとても切れ味の鋭いものであり、私も社会学者でありますので、このような議論を展開できるようになる実力がつけばよいなと率直に感じました。参加している学生のみなさんにも、学問というのは、これだけおもしろいものであり、かつ、人生に影響を与えうるものであるのだということが伝わったのではないでしょうか。上野先生、本当に有意義なお話をありがとうございました。

今後もジェンダーフォーラムではさまざまな催し物を企画していきたいと考えております。もし、こんな話が聞きたい、こんなことをやってほしいというご意見がありましたら、声をお聞かせください。また、ジェンダーフォーラムの部屋がありますので、気軽に訪れてみてください。